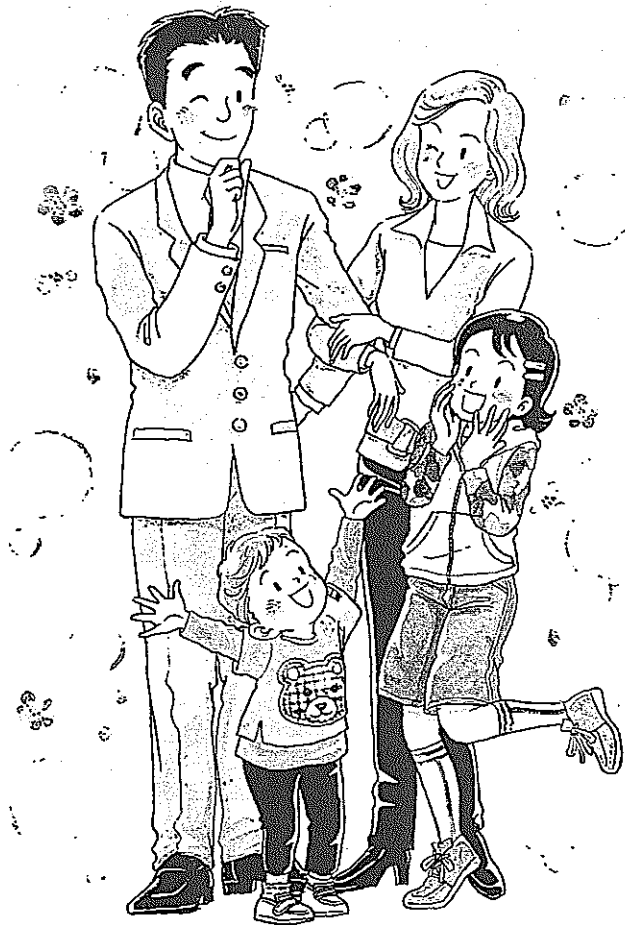


第2部 2025年の高島さん一家の暮らし

登場人物



夫 / 高島 健太 医薬品卸会社 営業職 (33歳) (旧姓 河原)
妻 / 高島 美咲 出版社勤務 児童書を担当 (33歳)
長女 / 高島 来夢 (らいむ) 小学校6年生 (12歳)
長男 / 高島 登夢 (とむ) 保育園児 (2歳10か月)

※夫婦の名は、1990年代の命名上位

6:30am

う、重い……。

健太は、何事かと思い、目を開ける。

どうやら寝ている健太の腹の上に、登夢が飛び乗ったらしい。登夢は、にいと笑って、「ババ朝！」

と一息に叫ぶと起きあがり、ばたばたとキッチンに駆けていった。

下の子の登夢は、やんちゃざかりで、時として思いもよらない行動にでる。

健太は、のそりと起き上がるとキッチンに向かった。今日、妻の美咲は、午前中、在宅勤務の日なので、今朝の朝食当番は、妻。それ以外の日は、健太が朝食当番。そういう約束。

テーブルに着くと、来夢と登夢はすでに食事を始めている。健太もゆっくりと席に着き、食事を始める。

「おみそ汁、味濃くない？」

「いいんじゃないの。」

あいまいに答える。頭はテレビのオン・ディマンド・ニュース専門チャンネルに集中。

—3年後にせまった日中韓を中心とした東アジアの通貨統合について、新通貨の単位を何にするか、政府間での綱引きが激しさを増しています。この問題に関し、一ノ瀬財務大臣は、……—

登夢に手がつかなくなるまでは、健太と美咲が1年交代で短時間勤務をし、2人とも仕事は辞めないことにしている。今は、健太が短時間勤務の番。もともと、フルタイムの美咲も週に3日は、午前中、在宅勤務なので、2人で子育てをしているという感じ。

7:10am

健太は、朝食を終えると、決まりきった儀式のように淡々と身支度を済ませる。玄関では登夢が待っている。

「じゃあ、行ってくるよ。登夢、ママに行ってきますは？」

「行ってきま〜す！」

笑顔の美咲は、両手の手のひらで登夢のほほをはさんで、優しくさすりながら言った。「いってらっしゃい。」

一家は、街の中心部から地下鉄で20分ほどのところに手頃な3LDKのマンションを借りている。夫婦でローンを組めば、都市部のマンションも十分購入可能なのだが、健太と美咲が学生時代から住んでいるこの街で、子どもの成長に合わせて住み替えていきたいと考えている。

健太は、登夢の手をひいて、ゆっくりと歩く。この辺は車道と歩道が分離されており、子どもを連れていても安心だ。登夢の歩みは、まだおぼつかないところもあるが、歩道には段差がなく、転ぶことは少ない。登夢は、保育園で習ったのだろうか、童謡を口ずさんでいる。ところどころ間違いながら。

※男女が家事を平等に分担。

※国際貿易や国際資本移動を一層円滑化するためドルに替わる基軸通貨を目指す導入。

※働き方の多様化が進み、子育て期間中は、夫婦で1.5人分の労働を選択する者が増加。

※土地利用の高度化（高層化、地下化）により地価は抑制。1人当たりの居住面積は拡大。

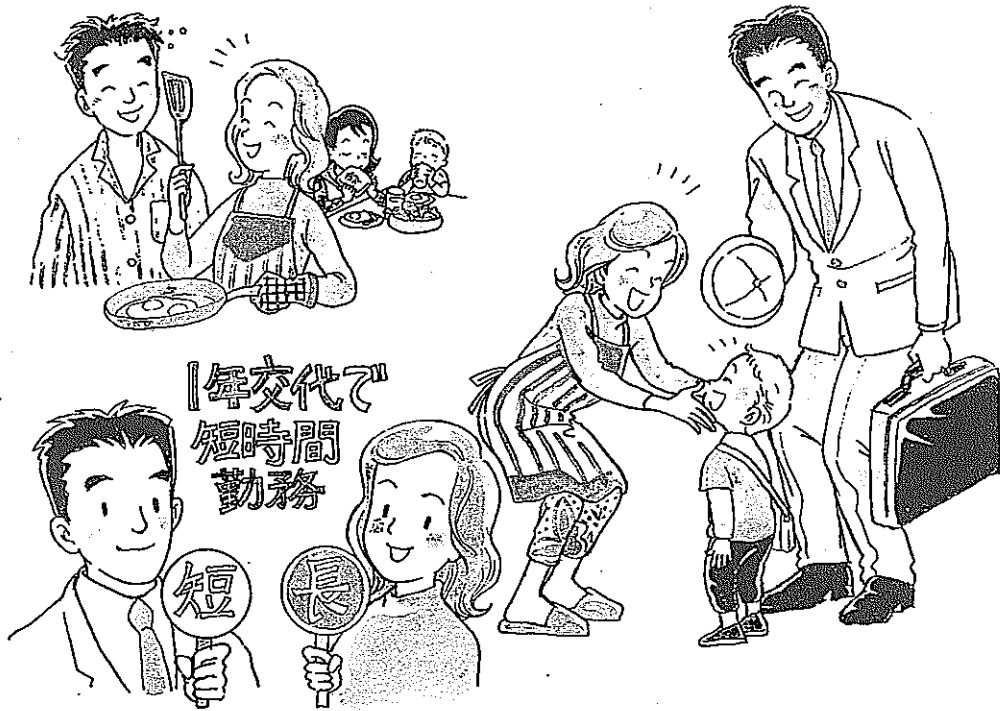
※歩行者優先の街づくり。

※街のバリアフリー化。

今日のように、美咲が午前中、在宅勤務をしている日は、こうして健太が登夢を保育園まで送る。つまりは、平日5日のうち3日は健太がこうして保育園まで送っていることになる。

※男女が育児を平等に分担。

駅の近くの保育園までは、ゆっくり歩いても10分に満たない。わずかな時間ではあるが、2人のコミュニケーションには大切な時間。登夢は思いついたように、突然、保育園での出来事や友達のことを話すこともあれば、ずっと歌を歌っていることもある。今日は歌いたい気分のように。



7:20am

「おはようございます。よろしくお願いします。」
「どうも、おはようございます。登夢君、おっはよう。」
「おはよう！」

※多様な働き方が普及するのに伴って、保育園の預かり時間も弾力化。

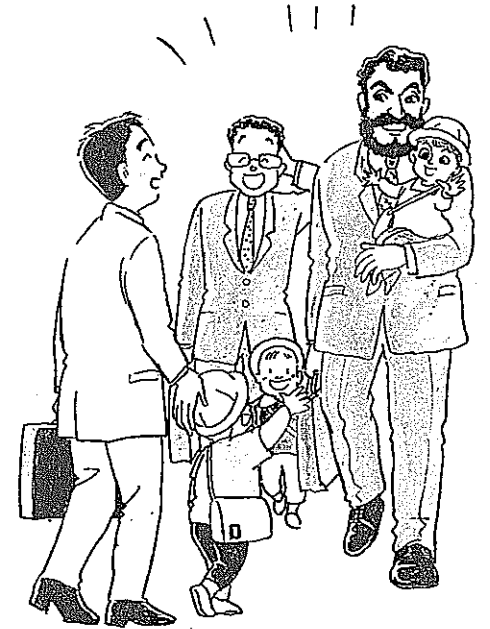
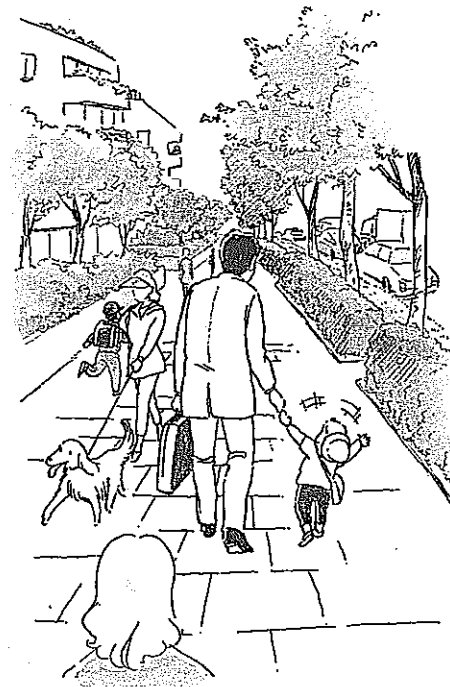
登夢は大きな声で保育士さんにあいさつをすると、健太にバイバイをして、建物の中へ駆けて行った。

保育園の入り口で、インド人のナムビア父子、田中父子と一緒にいる。健太のように父親が送りに来るのはよくある風景。

※国際結婚が増え、その子どもも増加。

「おはようございます。」
「ナマステ。おはようございます。」
「田中さんは、育休明けで会社復帰したんですね。」
「はい、先週から。会社からは定期的に情報をもらっていたんですけど、なかなか慣れないですよ。」

※男性の育児休業の取得が一般化。



7:30am

「ゲート・フリー・システム」が内蔵された携帯電話を持っているので健太が自動改札に近づくとももしないでも自動的に改札が開く。

この時間でも車内は意外と混んでいて、なかなか座れない。

とはいえ、雑誌を広げて読むゆとりは十分にある。健太がこの前テレビで見た、かつての「通勤地獄」とは比較にならないくらい楽ではある。あんなアクロバットな体勢で地下鉄に乗るとするのは、想像を絶する。

※定期券のIT化。
※今後も人口が都市部に集中するため乗客数はそれほど変化しないが、通勤時間の分散化により混雑緩和。

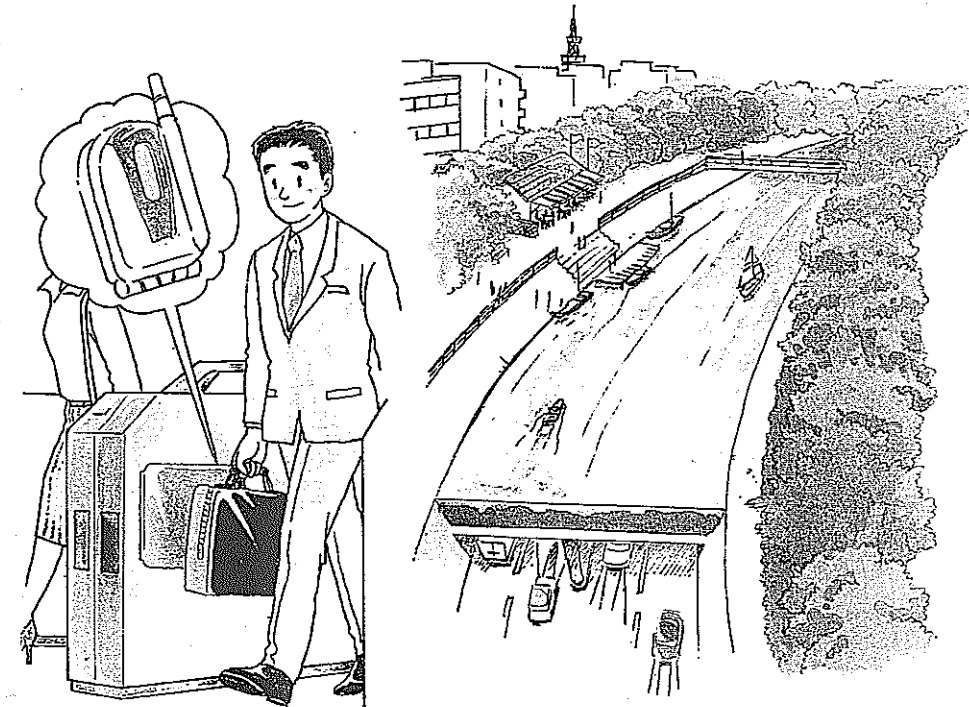
7:50am

業界紙にざっと目を通しているうちに、健太が通う営業所の最寄り駅に到着する。

外に出ると立ち並ぶビルすき間から朝日がまぶしい。営業所までは歩いて5分ほどだが、健太はその遊歩道が気に入っている。かつては、高速道路がおおいがぶり、その下を流れる水路が目にとまることなどなかった。10年ほど前の改修で、高速道路が地下にもくったおかげで、今はとても明るい、緑いっぱい水路となっている。

※駅付近。

※1960年代に建設された高速道路の改修では都市景観を重視。



8:00am

健太は席に着くと、パソコンで森田からの引継事項を確認する。

森田は派遣の短時間勤務職員で、健太と入れ替わりで、12時30分から5時30分までを担当している。一昨年末まで、同業他社で働いていたが、満60歳を期に退職。その後、1年間は、妻と2人で国内外を旅行したり、好きなピアノを習い直したりの悠々自適の生活だったらしい。

昨夜、「アポイントを申し込んでいた大崎病院の後藤先生。明日朝イチで訪問してください」と、山路から携帯のメールに伝言があったので、急いで準備をし、営業所の倉庫に向かう。

納品する商品は、電子受注システムを通して、昨日のうちに在庫係の山本が倉庫の所定の場所に並べている。

今日の納品は3か所。その前に大崎病院。

健太は、商品をチェックしながら手際よく営業車に載せ、出発する。

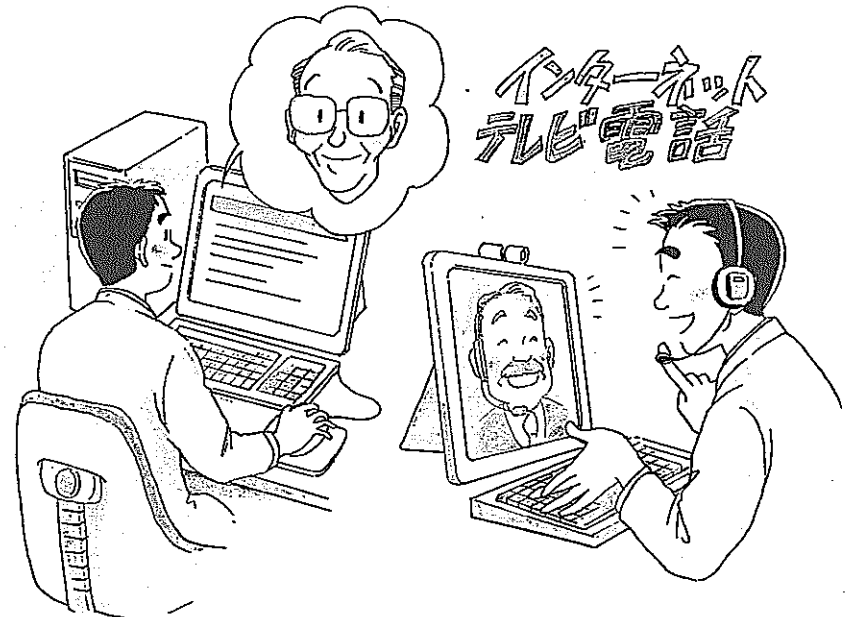
20年ほど前にインターネット発注システムが開発され、さらに、10年ほど前からインターネット・テレビ電話が普及したおかげで、おおかたのことは足を運ぶことなく済ませることができるようになった。とはいえ、どうしても営業は、フェイス・トゥ・フェイスの関係をおろそかにできない。健太も、できるだけ顔を近づけようとしている。

また、テーラーメイド医療で、患者ごとの診断と各種製造メーカーの医薬品とのマッチング役として、自らも病院経営に参画しているつもりで、病院に密着した事業展開がますます求められている。

卸売業も決して楽ではない。

※育児期間中の短時間勤務を選択しやすくするため、派遣労働者を活用し、交替制を導入する企業が増加。
※多様な働き方の普及により、高齢者の雇用の場が拡大。

※患者の細胞を加工することによる再生医療も含め、患者の遺伝子情報等に基づいて個別の患者ごとの治療法、投薬量などを決めるテーラーメイド医療が普及。



8:30am

大崎病院は、中規模の病院ではあるが、複数の診療科があって、地域の中では中核的な存在である。

病院に入ると、事務局に顔を出す。事務局長と軽く世間話をした後、内科の後藤先生を訪問。

「おお、河原君か。季節の変わり目だからカゼがはやってね。いつもの点滴薬ずいぶん使ってるよ。」

「河原」は健太の旧姓である。

最近、社会保障番号が確認できれば全ての契約で旧姓が利用できるようになったため、仕事上はもちろん、クレジットカードや銀行口座の名義も旧姓のままである。健太も美咲も姓にはこだわりはなかったが、美咲の祖父が、ひ孫に「高島」姓を名乗らせたと言ったので、そうしたのである。

「そうですか。あれは特許切れの医薬品で値ごろなのに、品質がいいから患者さんにも医者さんにも評判いいみたいですね。ところで、先生にアポイントを入れさせてもらいましたのは、このたび、いつも利用していただいている弊社のテラーメイド投薬のネットワークが拡張されるんですよ。小児科系の医薬品に強い製薬会社の商品・技術もコーディネートできるようになるので、小児科の先生にもどんどん利用してもらえようお願いします。」

「そうかね、それはありがたい。うちの病院はテラーメイドの投薬では地域の先端を走ってきたんだけど、うちの外科部長、この前、うちの病院の規模なら臓器再生はそんなに需要はないかもしれないけど、皮膚再生とかなら需要多そうだって言ってたな。おたくの細胞加工サービス評判いいらしいね。一度話聞かせてもらえないかな。」

「ありがとうございます。ぜひ、では、また改めてお話しさせていただきます。」

※各人の社会保障情報の提供のために社会保障番号を漏入。
※アメリカのように社会保障番号を個人の照合にも活用。
※姓へのこだわりの希薄化。



8:30am

美咲は朝食の後片づけを済ませると、来夢と一緒に部屋の掃除や洗濯を手際よくこなす。

小学校に来夢を送り出した後、美咲はパソコンに向かう。会社のサーバーにログインし、在宅勤務の開始手続きをする。

※在宅勤務の時間管理。

美咲が勤める出版社は、規模こそ大きくないが、最近では小学生向けの「ロックウェル騎士団の冒険」シリーズをヒットさせている。児童向けの洋書を翻訳し、発行する出版社なのだが、いい本を見つけられれば、会社の大小は関係ない。

また、会社としては、要は期限までにモノができあがればいいわけで、勤務形態はかなり融通がきく。もっとも、裏をかえせば、成果にはシビアともいえる。

社内の男女比は、ほぼ1:1。上司も同僚も育児に理解がある。

先日、登夢が急に熱を出して保育園を休んだときも、快く看護休暇をとらせてくれたのはありがたかった。

※男女共同参画社会の確立。
※育児に対する社会的な支援意識の拡大。
※看護休暇制度の普及。

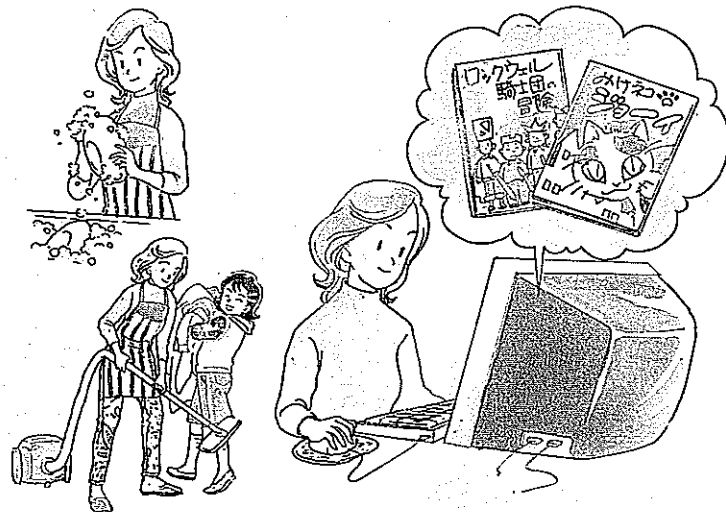
かつて大流行した、小さい子どもへの「読み聞かせブーム」は、一時の流行に終わることなく、家庭教育の一環として、小さい頃から親子と一緒に読書をする習慣が定着した。

おかげで、「児童書」というジャンルの市場規模も拡大している。

※家庭教育の充実。

美咲にとっては、何より、自分の子どもに自分が手がけた絵本を読んで聞かせるのが楽しみでもあり、登夢は、美咲がアメリカで発掘した作家の「みけねこジョーイ」のシリーズに夢中だ。

絵本の世界に国境はない。だから、優れたものがあれば、海外の絵本も、どんどん日本の子どもたちに紹介したい。美咲は、先週も、イギリスにいる代理人を通じて、現地で最近注目されつつある絵本作家に日本語版翻訳の話をおファーしている。その際に先方から聞かれていた契約上の詳細事項について回答を作成する。これならOKがもらえるのではないだろうか。期待がこもる。



11:30am

「あ、山路君。点滴薬のルジオミン、かなり処方が増えているようだから在庫確認しておいてね。」

健太は上着を脱ぎながらパソコンに向かう部下の山路に声をかける。

「カゼはやってるらしくて、ネットの発注でもルジオミン、結構出ますね。在庫は大丈夫みたいですけど、あ、それと河原さん。この前の浜田薬局の分なんですけど、メーカーから商品が届いたそうですよ。」

「あ、そう。あそこは森田さんも顔がきくから、午後に森田さんに行ってもらおうか。」

席に着くと、午前中に携帯で処理した発注をパソコンで確認する。電子化は進んでも、人為的なミスは起こりうる。地道な確認作業を怠ることはできない。

発注に間違いがないことを確認すると、在庫管理システムで在庫を確認する。発注分はすでにでも準備できそうだ。あさってには十分間に合う。あとは事務の山路に任せる。



0:30pm

森田が出社してきた。

「おはようございます。今日の大崎病院どうでしたか。」

「ええ、内科部長からの話だと、大崎病院もそろそろ再生医療始めたいと思ってるみたいです。今度、うちの細胞加工サービスの説明聞いてみたいって言ってたので、明日にでも、プレゼンに行ってくださいかと思ってるんです。」

午前中の状況と浜田薬局への納品について、健太は森田に引き継ぐと、帰り支度を始める。

「河原さん、子供がわいさかりでしょ。登夢君でしたっけ。」

「そうですね。やんちゃで困りますよ。今日も体当たりで起こされたし。それじゃあ、あと、よろしくをお願いします。」

健太は時計を見る。1時。

部屋を出ようとしたところで、あっ、と小さな声を出して健太は振り返った。

「森田さん、申し訳ないです。営業の車、水素入れといてください。」

※環境問題に配慮した水素自動車の普及。

